

黒櫛橋

〔倭訓栞中編六〕ぐるすのはし。古事記に黒櫛橋と見ゆ、黒木の丸太を打渡し、其中に柴薪を挟みて造るをいふ、今も山川に多し、

〔古事記垂仁〕本牟智和氣御子略八拳鬚至于心前、眞事登波受略故今聞高往鵠之音始爲阿藝

登比略爾遣山邊之大鶴略令取其鳥略亦見其鳥者、於思物言而、如思爾勿言事、於是天皇患

賜而御寢之時、覺于御夢曰、修理我宮如天皇之御舍者、御子必眞事登波牟自登下三如此覺時、布斗

摩邇邇占相而求、何神之心、爾崇出雲大神之御心略故到於出雲、拜訖大神、還上之時、肥河之中作

黒櫛橋、仕奉假宮而坐、

〔古事記傳二十五〕黒櫛橋は、久漏岐能須婆斯と訓べし、櫛字は巢と同じければ、篋の意に借れる

なり、又以簿取魚曰櫛とも字書に云れば、直に篋の義に書るにもあるべし、さて竹葦などは常に編

むるも是なるべし、篋は筥とて、小籠のことにて、由なれば、篋字を誤れる例あり、黒とは黒木

なるを云なるべし、故木字は無けれど、然訓つては、黒木を云なるべきに、たゞ久漏とのみに

ど、いかに訓ても、穩ならざればなり、又黒木をおきては、他に黒と云べき由おもほえず、谷川氏

云、黒櫛橋とは、黒木のまるたを打渡して、其中に柴などを挟みて造るを云、今も山川に然せる

橋多しと、さて此は假宮に往來ふ料に、假に渡せる橋なり、

〔八雲御抄三上〕橋 玄ば

〔夫木和歌抄二十一〕建仁元年五十首橋下花 しばはし

あともなき山路の櫻ふりはへてとはれぬ、さるき谷の玄ばはし

〔太平記三十九〕光嚴院禪定法皇行脚御事

光嚴院禪定法皇ハ、略人工行者ノ一人ヲモ不被召具、只順覺ト申ケル僧ヲ一人御供ニテ、山林

斗藪ノ爲ニ出立サセ給フ、略經日紀伊川ヲ渡ラセ給ヒケル時、橋柱朽テ見ルモ危キ柴橋アリ、

柴橋

前中納言定家卿